川崎市国際交流協会会長賞

## 家族の大切さ

上作延小学校　6年生　當　唯愛

二〇二十年五月十日。あの日を忘れたことはない。私は小愛（こあ）という名前の犬を飼っていた。女の子の十四才。母と同じたんじょう日。私が生まれた時から、ずっと一緒だった。だけど小愛は私に、あまりなついてくれなかった。理由は分かっている。小愛が大好きな母を私に取られたからだ。それもそのはず。私が赤ちゃんの時なんて、小愛をかまう時間は数分。私のせいで母は小愛にかまう時間がなかった。小愛の性格は他の犬や、家族以外の人は苦手。更にしっと深い。だから私を好んではくれなかった。だけど私はまだまだおさなかったことも有り、小愛の気持ちに気づいてあげられず、いたずらばかりしていた。

月日が流れて、小愛は年れいのこともあり、ご飯を今まで通り食べなくなったり、はげしく遊ばなくなったりするようになってしまった。しかし、私は小愛の心配などせず、「他の犬の方がふわふわしてて可愛い」などばかり言っていた。その後小愛は食欲をとりもどし、少しずつ普通の犬へと回復していった。私の心は小愛とはなれたままだった。

五月十日。私はいつも通り学校に行き、特に何もなく帰って夜ご飯を食べてねた。しかしその日の深夜、母が泣きながら私のことを呼んだ。まだ十才の私。何がどうしたのかよく分からなかった。起きた後リビングに行くと、ぐったりした小愛がいた。遠くの犬用ベッドにいることがはっきり分かった。とても苦しそう。母は泣きながら私に話しかけてきた。でも私は母の声など耳に入ってこなかった。数分後。更に小愛は苦しそうにし始めた。そしてぐったりねていたのに、急にこちらに近づいてきた。少し私はホッとした。立てるくらいに体の調子がもどったのかと思ったからだ。でもちがった。最後の力をふりしぼって、大好きな母の元へ行こうとしていたのだ。でも母がなでてあげる間もなく、息を引きとった。たおれる時、ちゃんと母のひざの上にたおれた。

小愛が息を引きとる前、いっしゅんだけ目が合った。その目は真っ直ぐ私を見ていた。そして何かを伝えようとしている目だった。私はその場で何を言われているかよく分からなかった。今は自分なりに考え、「家族をよろしく」という言葉を言われたのではないかと思っている。私と小愛は姉妹のようであった。私が近づくとはなれて行ってしまう。だけどふと見ると、私のそばにいてたまに心を開いてくれることもあった。十一年間一緒に過ごしてきて色々な思い出もある。本当は私のことも家族の一員として、好きだと思ってくれたのかもしれない。もしもう一度、小愛に会えるとしたら、二人で一緒に写真をとりたい。

私は大切な家族との別れをきっかけに、命の大切さ、家族の大切さを知った。将来、家族を大切にできる「小愛」みたいな人間になりたいです。